

阪南市埋蔵文化財報告 60

阪南市埋蔵文化財発掘調査概要 38

2020年

阪南市教育委員会

## はしがき

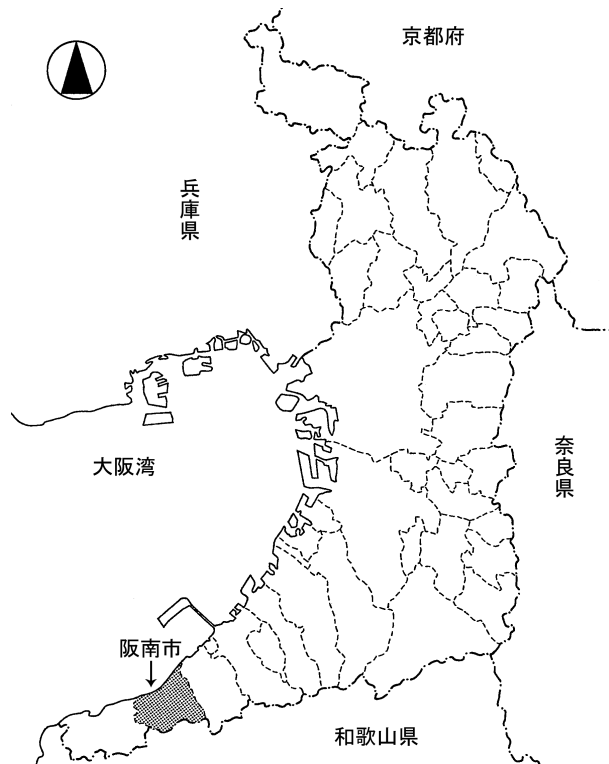
阪南市は北に大阪湾を隔てて淡路島を望み、南は和泉山脈を越えて和歌山県にいたる、大阪府下でも自然豊かな立地に所在しています。

高度成長期に始まった開発の波が自然破壊と共に多くの遺跡を破壊していく中で、当市教育委員会では昭和60年度より国庫補助金を受けて発掘調査を続けてまいりました。その結果、地域の歴史が徐々に解明されています。

本書は令和元年の国庫補助事業として実施した発掘調査概要報告書です。今後、多方面において、ご活用いただけるようお願いしております。

最後になりましたが発掘調査に際し、開発者や土地所有者並びに関係者各位にはご協力を賜り、感謝をいたしますとともに、今後も当市の文化財行政にご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和2年3月31日  
阪南市教育委員会



第1図 大阪府阪南市位置図

## 例 言

1. 本書は、阪南市教育委員会が市内において実施した阪南市埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成31(令和元年)の国庫補助事業として計画、実施した。
3. 現地における調査は、阪南市教育委員会生涯学習部生涯学習推進室田中早苗、山千代明日香、島田万帆(嘱託)を担当として行った。
4. 本書内で示した標高はT.P.(東京湾平均海面)を基準としている。
5. 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修 小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(2000年版)を使用した。
6. 発掘調査にあたっては関係者各位の理解と協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。
7. 本書における記録は実測図、写真、カールスライド等で保存し、当教育委員会にて保管しているので、広く活用されたい。
8. 本書の執筆、編集は阪南市教育委員会生涯学習部生涯学習推進室田中早苗、山千代明日香、島田万帆が行った。
9. 発掘調査および整理作業に以下の方々の参加を得た。  
古牧 敬、杉田正千代、滑田幸男、菱山良太、湯川和彦、井上祥子、井上 進、岩間洋樹、中寺幸子、柳沼綾美、武田英理

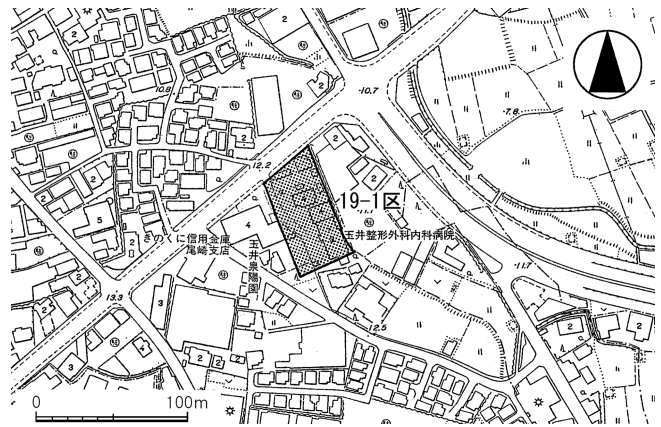
## 目 次

|     |           |             |    |
|-----|-----------|-------------|----|
| 第1節 | 下出北遺跡     | (1) 19 - 1区 | 1  |
| 第2節 | 西鳥取遺跡     | (1) 18 - 2区 | 3  |
|     |           | (2) 19 - 1区 | 4  |
| 第3節 | 向出遺跡      | (1) 19 - 1区 | 6  |
|     |           | (2) 19 - 2区 | 7  |
| 第4節 | 神光寺(蓮池)遺跡 | (1) 18 - 1区 | 8  |
|     |           | (2) 18 - 2区 |    |
|     |           | (3) 19 - 1区 | 9  |
| 第5節 | 小口谷遺跡     | (1) 19 - 1区 | 10 |
| 第6節 | 寺田山遺跡     | (1) 19 - 1区 | 11 |
| 第7節 | 貝掛遺跡      | (1) 19 - 1区 | 13 |
|     |           | (2) 19 - 2区 | 14 |
| 第8節 | 箱作今池遺跡    | (1) 19 - 1区 | 17 |
|     | 報告書抄録     |             | 18 |



## 第1節 下出北遺跡

下出北遺跡は阪南市の東端を流れる男里川の左岸に位置し、平成7(1995)年度に行った民間開発工事に伴う試掘調査の95-1区で発見された遺跡である。その調査では、弥生時代の土坑や弥生土器、土師器、須恵器等の遺物を含む南北方向の流路等が検出されている。



第3図 下出北遺跡 調査区位置図

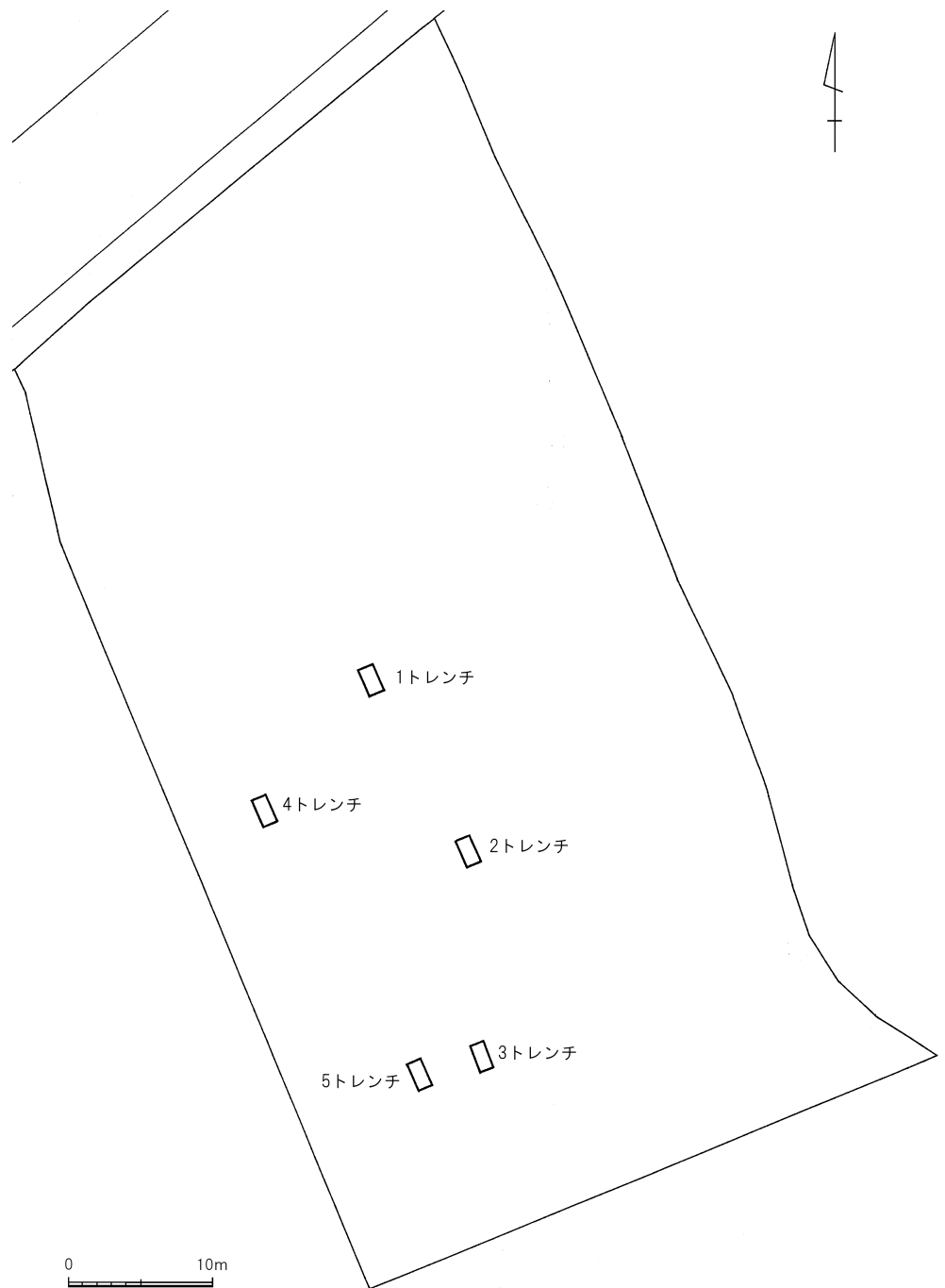
### (1) 19-1区

(第3～5図)

調査区は下出北遺跡の西部に位置する。調査区内に5ヶ所のトレンチを設定し、全体で10.00㎡の調査を行った。

1・2トレンチの基本層序は第1層盛土、第2層が10YR4/4褐色砂礫混粘質土の地山で、T.P. +11.00mで検出した。

3～5トレンチの基本層序は第1層盛土、第2層耕作土、第3層床土で、第4層以下は各トレンチで様相が異なる。3トレンチは第4層が2.5 Y4/6オリーブ褐



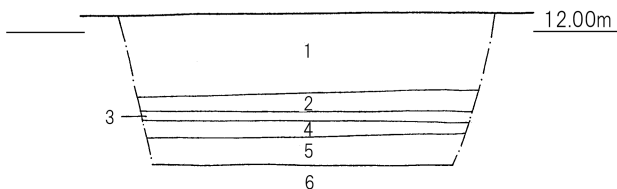
第4図 下出北遺跡19-1区 トレンチ位置図

色砂質土、第5層が2.5Y5/6黄褐色砂、第6層10YR4/6褐色風化礫混土。4トレンチは第4層10YR4/6褐色風化礫混砂質土、第5層10YR3/4暗褐色風化礫混土、3・4トレンチの第6層は10YR5/8黄褐色礫混土の地山で、T.P. +11.30mで検出した。5トレンチは第4層が10YR5/4にぶい黄褐色土(2.5Y7/1灰白色土混)、第5層は3・4トレンチと同じ10YR5/8黄褐色礫混土の地山で、T.P. +11.65mで検出した。

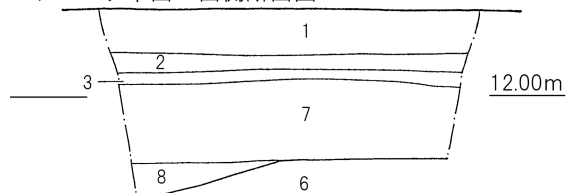
遺物は3トレンチの第4層から土師器、土師質土器、4トレンチの第4層から土師質土器、第5層から奈良時代と思われる土師器が、5トレンチの第4層から須恵器、近世瓦、スサ入焼土塊が出土した。

遺構は5トレンチの地山面で土坑を1基検出した。東西0.25m以上、南北0.75m以上、深さ0.16mで、トレンチ外へ広がる。埋土は2.5Y5/4黄褐色砂質土で、遺物は出土しなかった。

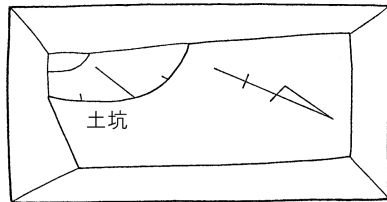
4トレンチ 東側断面



5トレンチ平面・西側断面図



地山面

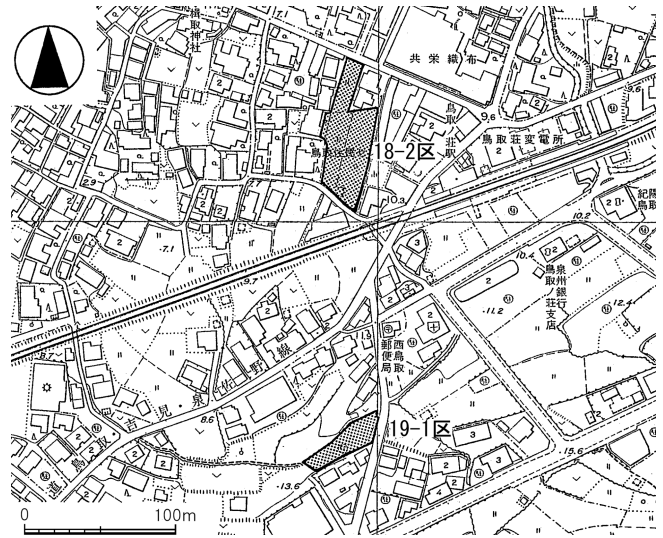


- 1 盛土
- 2 耕作土
- 3 床土
- 4 10YR4/6 褐色風化礫混砂質土
- 5 10YR3/4 暗褐色風化礫混土
- 6 地山：10YR5/8 黄褐色礫混土
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色土(5Y7/1 灰白色土混)
- 8 土坑：2.5Y5/4 黄褐色砂質土

第5図 下出北遺跡19-1区 4・5トレンチ平面・断面図

## 第2節 西鳥取遺跡

西鳥取遺跡は市域北部に広がる平野部の西側に位置し、北東は波有手遺跡、東は鳥取南遺跡に接し、西約20mに戎遺跡が所在する。昭和63(1988)年度に阪南町教育委員会(当時)が行った埋蔵文化財分布調査により発見され、現在までに30数件の調査が行われているが、調査は全て小規模なもので、遺跡の詳細は現在のところ不明である。



第6図 西鳥取遺跡 調査区位置図

### (1) 18-2区(第6~8図)

調査区は西鳥取遺跡の北部に位置する。調査区内の南部に4.0m×3.0mのトレンチを設定し、調査を行った。

基本層序は第1層耕作土、第2層床土、第3層は10YR5/8黄褐色粘土(マンガン混)の地山である。地山は地表面から約-0.20m~0.30mで検出した。

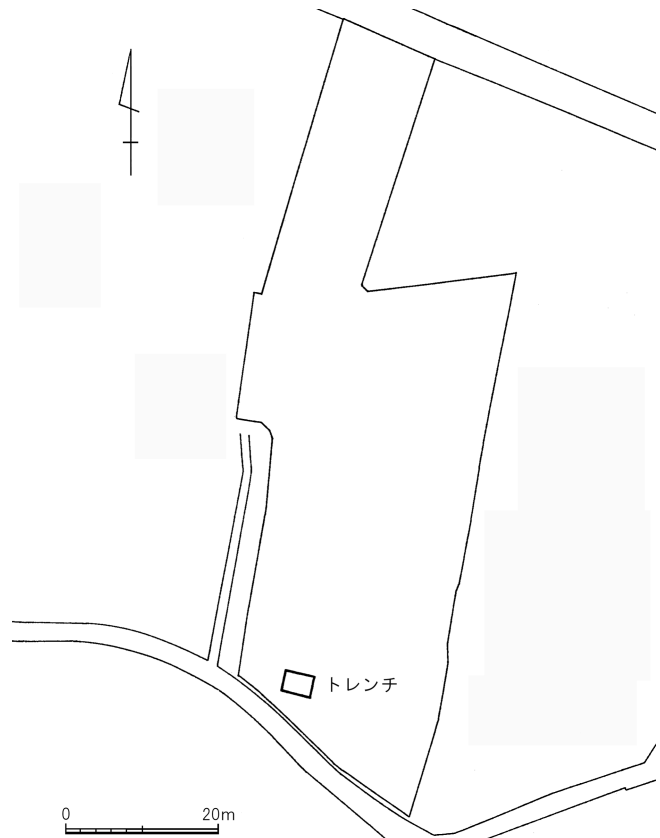
遺構は地山面で土坑を4基検出した。

土坑1は東西2.10m、南北1.80m以上、深さ0.55mで、埋土は上層が2.5Y5/6黄褐色砂質土(マンガン混)、下層が2.5Y6/2灰黄色砂である。遺物は上層から土師器、須恵器、土師質土器、瓦器、土師質真蛸壺が、下層から土師質真蛸壺、鉄釘が出土した。

土坑2は東西1.00m以上、南北2.80m以上、深さ0.15mで、土坑4を切っている。埋土は2.5Y6/4にぶい黄色砂混粘質土である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、中世瓦が出土した。

土坑3は東西0.15m以上、南北1.20m以上、深さ0.30mで、埋土は2.5Y5/4黄褐色砂混粘質土である。遺物は出土しなかった。

土坑4は東西0.50m以上、南北0.55m以上、深さ0.20mで、土坑2に切られて

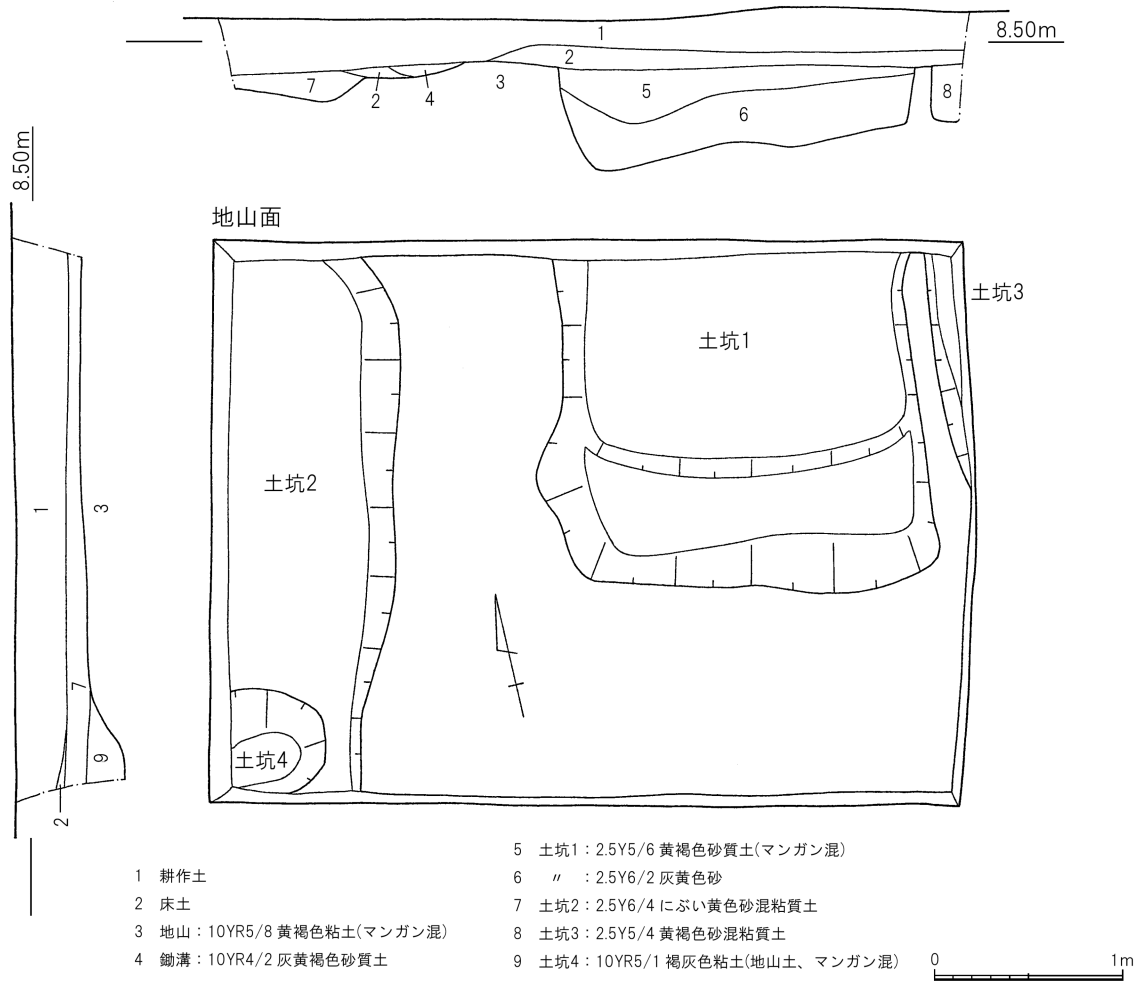


第7図 西鳥取遺跡18-2区 トレンチ位置図



いる。埋土は地山土混じりの10YR5/1褐灰色粘土(マンガン混)である。遺物は土師質土器、炭化物が出土した。

土坑はいずれもトレンチ外へ広がり、周辺の既往調査から粘土採掘跡と考えられる。

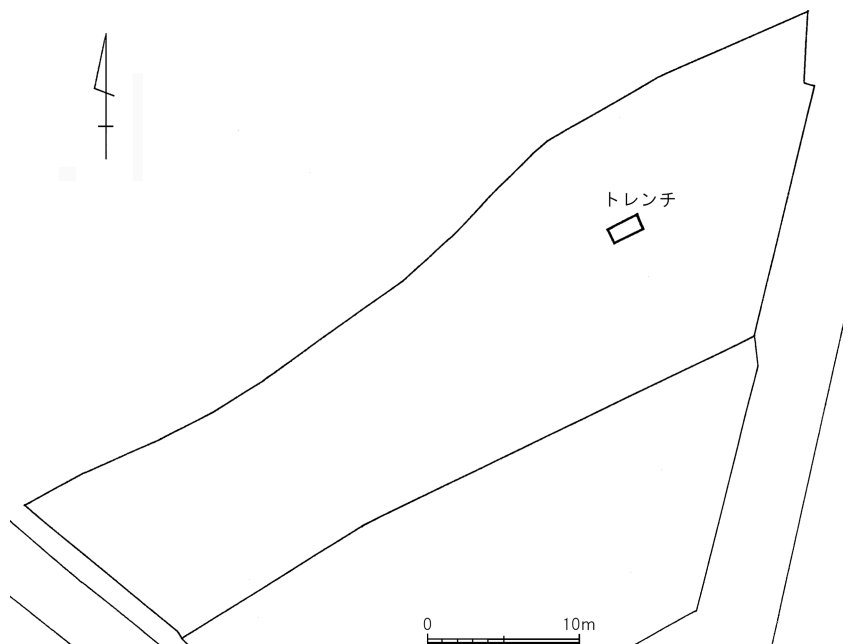


第8図 西鳥取遺跡18-2区 トレンチ平面・断面図

(2)19-1区  
(第6・9・10図)

調査区は西鳥取遺跡の中央部に位置する。調査区内の東部に2.2m×1.1mのトレンチを設定し、調査を行った。

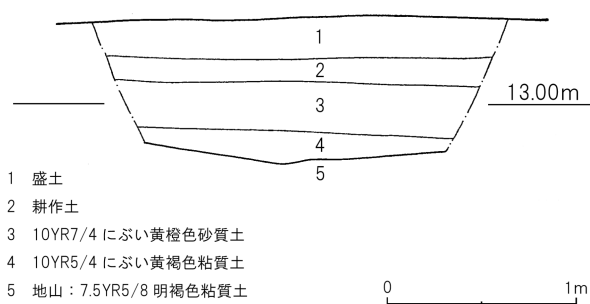
基本層序は第1層盛土、第2層耕作土、第3層10YR7/4にぶい黄橙色砂質土、第4層10YR5/4にぶい黄褐色粘質土、第5層は7.5



第9図 西鳥取遺跡19-1区 トレンチ位置図

YR5/8明褐色粘質土の地山である。地山は地表面から約-0.70mで検出した。

遺構は検出されず、遺物は出土しなかった。



第10図 西鳥取遺跡19-1区 トレンチ南側断面図

### 第3節 向出遺跡

向出遺跡は阪南市の東部を流れる男里川の支流である山中川と菟砥川に挟まれた河岸段丘とその氾濫原に位置する。昭和62(1987)年度に阪南町教育委員会(当時)が行った埋蔵文化財分布調査によって発見された。遺跡は東西約300m、南北500mと阪南市内では比較的大きい。遺跡の北部は調査件数が少ないため詳細は不明であるが、中央部で行った00-2区と06-1区の調査では、古墳時代中期の竪穴住居が各1棟確認された。南部では、平成9年に(財)大阪府文化財調査研究センター(当時)が行った国道26号線(第2阪和国道)延長工事に先立つ事前調査で、縄文時代後期から晩期の西日本最大級の土坑墓群が検出されている。また、遺跡の南部からは中世瓦が出土しているものの、寺院等に関連する遺構は、現在のところ確認されていない。

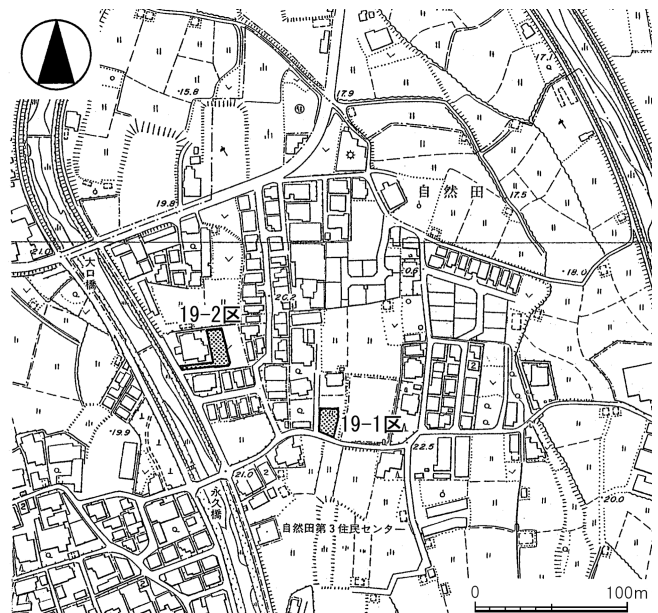
#### (1) 19-1区(第11~13図)

調査区は向出遺跡の西部に位置する。調査区内の南部に2.6m×1.2mのトレンチを設定し、調査を行った。

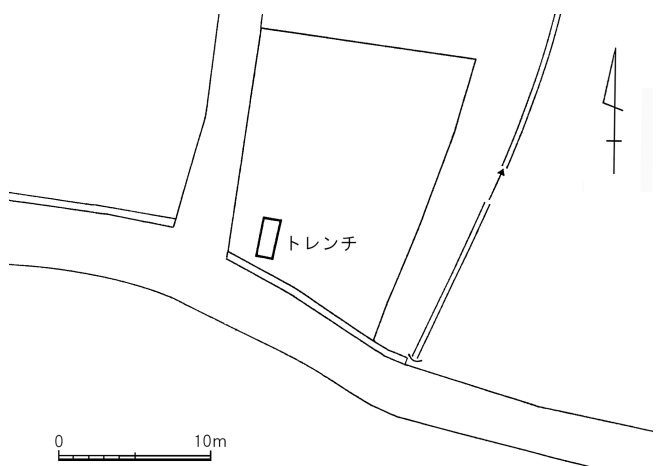
基本層序は第1層耕作土、第2層10YR 7/3にぶい黄橙色砂質土、第3層10YR 5/8黄褐色砂質土、第4層は2.5Y6/4にぶい黄色風化礫混土の地山で、地表から約-0.20m~0.30mで検出した。

遺物は、第2層から中世瓦、第3層から土師質土器、瓦器、中世瓦が出土した。いずれも中世期の層である。

遺構は地山面で、竪穴住居を1棟検出した。大半はトレンチ外へ広がるため規模は不明であるが、東西0.82m以上、南北1.30m以上、深さ0.19mを測り、平面は隅丸方形を呈すると思われる。竪穴住居の南部にはカマドが造り付けられていた。カマドは一部残存しており、2.5Y6/6明黄褐色粘土で構築されている。内部には5YR4/4にぶい赤褐色粘質土の焼面と

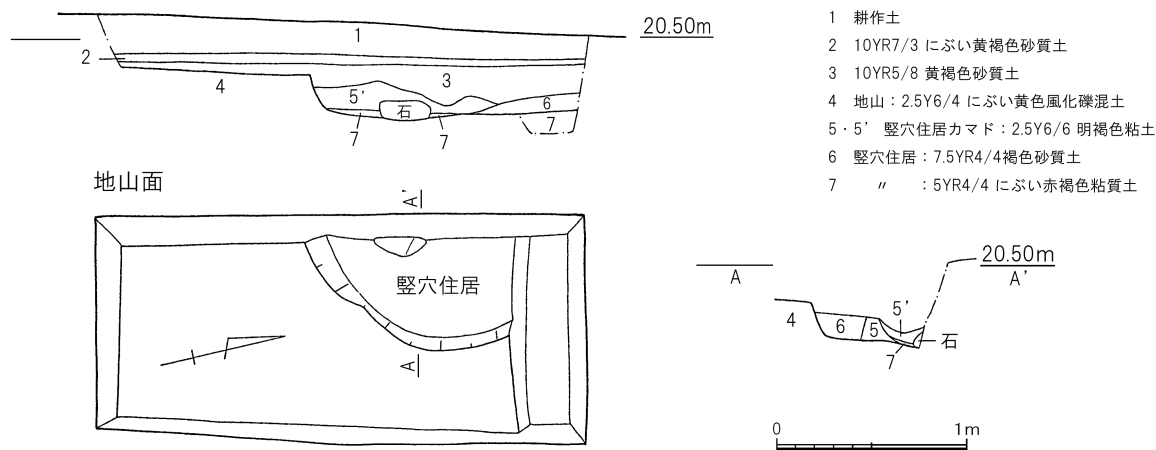


第11図 向出遺跡 調査区位置図



第12図 向出遺跡19-1区 トレンチ位置図

据え付けられた支脚石が現位置を保って残っていたものの、竪穴住居が7.5YR4/4褐色砂質土である程度埋まった後に、カマドの大半は崩れたと思われる。遺物は7.5YR4/4褐色砂質土からスサ入り焼土塊が出土したが、時代を特定できる遺物は出土しなかった。



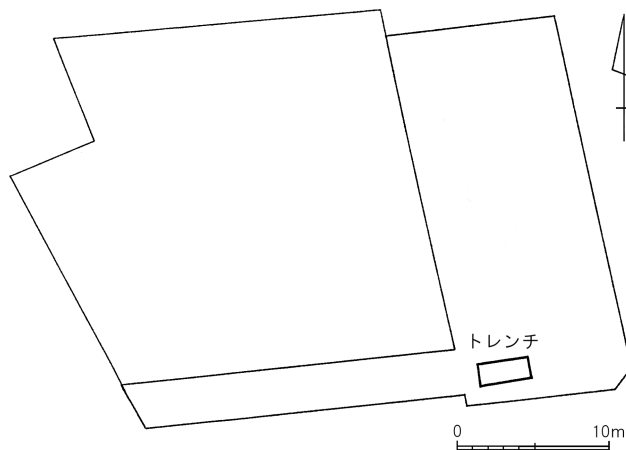
第13図 向出遺跡19-1区 トレンチ平面・断面図

(2) 19-2区 (第11・14図)

調査区は向出遺跡の西部に位置する。調査区内の南部に3.4m×1.5mのトレンチを設定し、調査を行った。

基本層序は盛土のみで、地表面から約-2.00mまで掘削したが地山の検出にはいたらなかった。

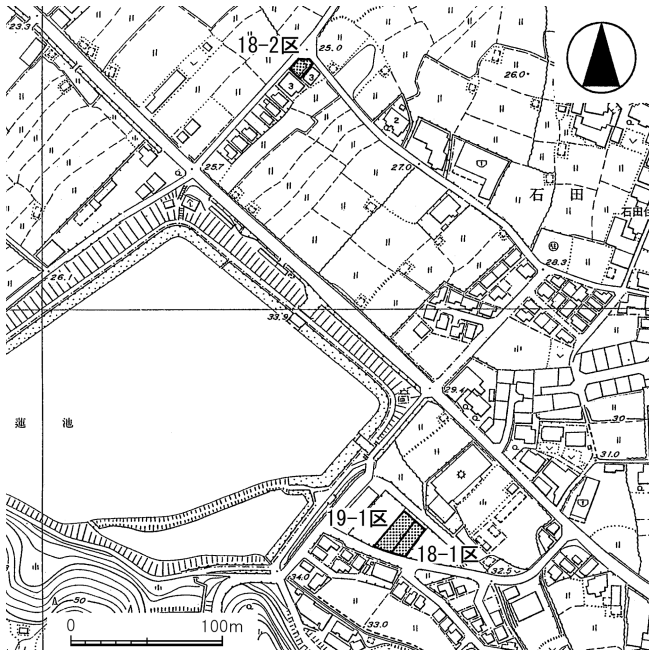
遺構は検出されず、遺物は出土しなかった。



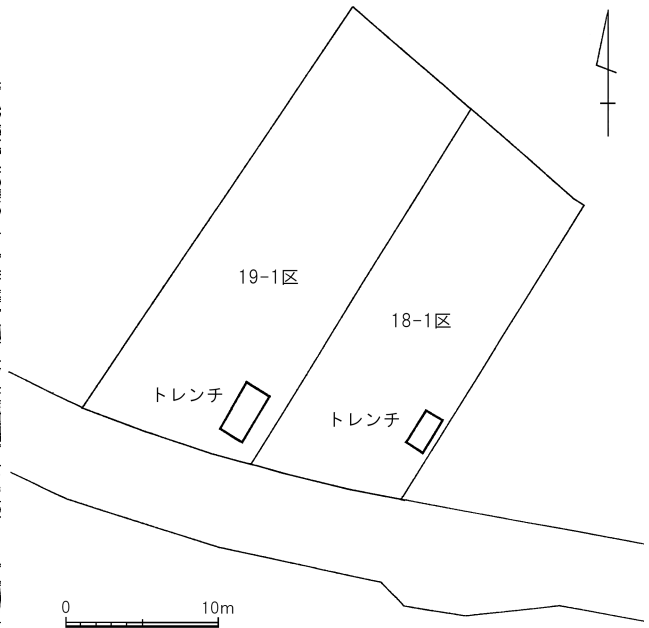
第14図 向出遺跡19-2区 トレンチ位置図

## 第4節 神光寺(蓮池)遺跡

神光寺(蓮池)遺跡は市内で古くから知られている縄文時代草創期から近世期にかけての複合遺跡で、その規模は東西約700m、南北約800mに及ぶ。遺跡の中央部には市内最大の灌漑用溜池である蓮池が存在し、池底から採取されたサヌカイト製有茎尖頭器は現在のところ市内で最古の遺物である。既往の調査では弥生時代中期の方形周溝墓が検出されているほか、当遺跡の南部に位置する波太神社の神宮寺であった神光寺の瓦が出土していることも特筆される。



第15図 神光寺(蓮池)遺跡 調査区位置図



第16図 神光寺(蓮池)遺跡18-1区・19-1区  
トレンチ位置図

### (1) 18-1区(第15・16図)

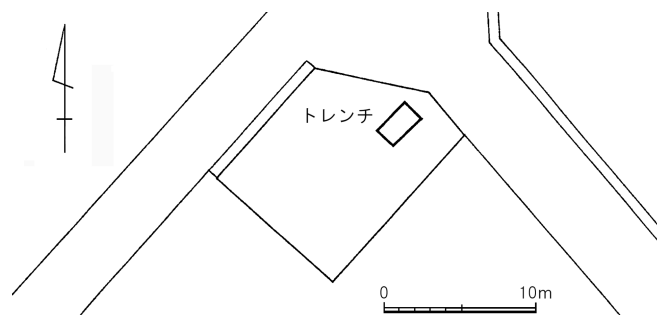
調査区は神光寺(蓮池)遺跡の南部に位置する。調査区内の南部に2.5m×1.3mのトレンチを設定し、調査を行った。

基本層序は第1層盛土、第2層耕作土、第3層10YR6/4にぶい黄橙色粘土、第4層10YR5/3にぶい黄褐色風化礫混粘土である。第3・4層は地山で、地表面から約-1.10mで検出した。

遺構は検出されず、遺物は出土しなかった。

### (2) 18-2区(第15・17～19図)

調査区は神光寺(蓮池)遺跡のほぼ中央部に位置する。調査区の東部に2.5m×1.5mのトレンチを設定し、調査を行った。

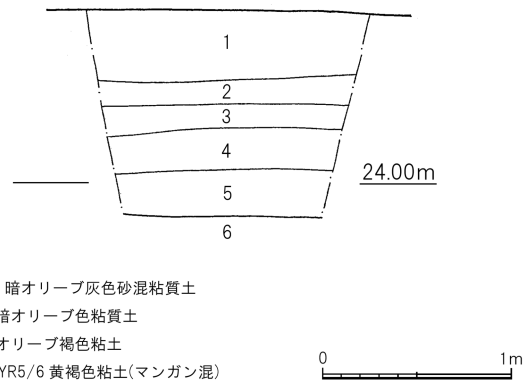


第17図 神光寺(蓮池)遺跡18-2区 トレンチ位置図

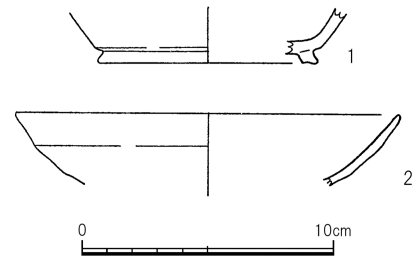
基本層序は第1層盛土、第2層耕作土、第3層2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂混粘質土、第4層7.5Y4/3暗オリーブ色粘質土、第5層2.5Y4/3オリーブ褐色粘土、第6層は10YR5/6黄褐色粘土(マンガン混)の地山である。地山は地表面から約-1.10mで検出した。

遺物は第3層から土師質土器、製塩土器(奈良)、第4層から須恵器、黒色土器、土師質土器、瓦器、製塩土器(奈良)、第5層から須恵器、土師質土器、瓦器、炭化物が出土した。いずれも中世期の層である。1は須恵器杯身で第4層から、2は瓦器碗で第5層から出土した。

遺構は検出されなかった。



第18図 神光寺(蓮池)遺跡18-2区 トレンチ西側断面図



第19図 神光寺(蓮池)遺跡18-2区 出土遺物

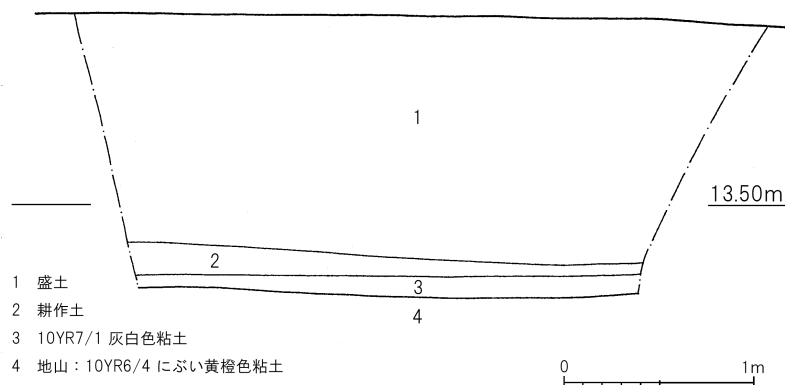
### (3) 19-1区(第15・20図)

調査区は神光寺(蓮池)遺跡の南部に位置する。調査区内の南部に3.6m×1.8mのトレンチを設定し、調査を行った。

基本層序は第1層盛土、第2層耕作土、第3層10YR7/1灰白色粘土、第4層は10YR6/4にぶい黄橙色粘土の地山である。地山は地表面から約-1.50mで検出した。

遺物は第3層から土師質土器が出土した。中世期の層と思われる。

遺構は検出されなかった。



第20図 神光寺(蓮池)遺跡19-1区 トレンチ東側断面図

## 第5節 小口谷遺跡

小口谷遺跡は、東西約100m、南北約150mで、北は神光寺(蓮池)遺跡、南には石田山遺跡、井関遺跡が存在する。昭和62(1987)年度に阪南町教育委員会(当時)が行った埋蔵文化財分布調査により発見、周知された。

その調査では、石器、土師系土器、須恵系土器、瓦質系土器、瓦、陶器、磁器等とともにチャート剥片、青磁が検出されている。

小口谷遺跡内での発掘調査は、今回が初めてである。

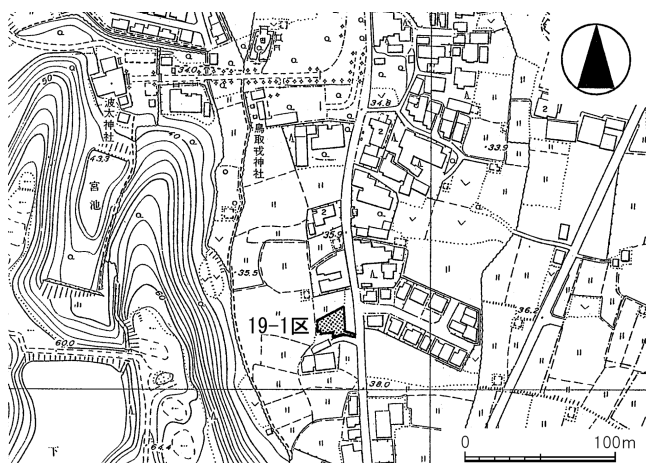
### (1) 19-1区(第21~23図)

調査区は小口谷遺跡の南東部に位置する。調査区内の東部に2.5m×1.4mのトレンチを設定し、調査を行った。

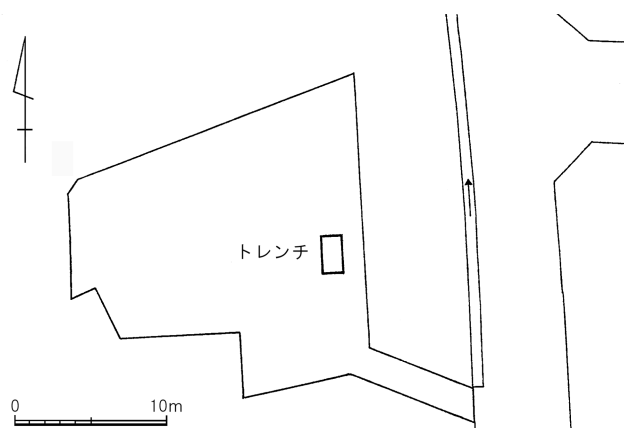
基本層序は第1層盛土、第2層耕作土、第3層床土、第4層10YR4/4褐色粘質土、第5層は2.5Y4/4オリーブ褐色礫混粘質土の地山である。地山は地表面から約-0.70mで検出した。

遺物は第4層から土師質土器、瓦器、製塩土器(奈良)が出土した。中世期の層と思われる。

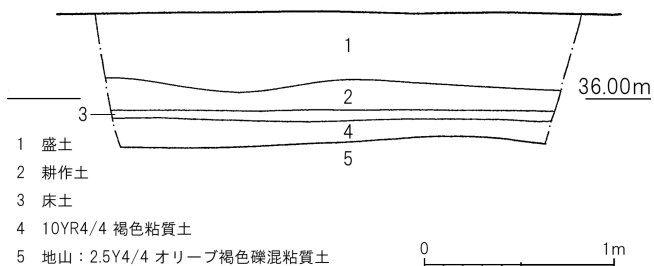
遺構は検出されなかった。



第21図 小口谷遺跡 調査区位置図



第22図 小口谷遺跡19-1区 トレンチ位置図



第23図 小口谷遺跡19-1区 トレンチ東側断面図

## 第6節 寺田山遺跡

寺田山遺跡は、東西約140m、南北約130mで、北は自然田遺跡、東は玉田山古墳群に隣接し、西部は菟砥川が南北に流れる。昭和58(1983)年に発行された『阪南町史 上巻』には、すでに掲載されている遺跡である。それには「縄文文化に伴う石器の出土が伝えられている」と記されている。

阪南市が行った平成11(1999)年度の調査では、竪穴住居をはじめ、土坑、溝、ピット等が検出され、弥生から近世期までの遺物が出土している。中でもサヌカイト製石器と大量の剥片が出土しているのが特徴的である。

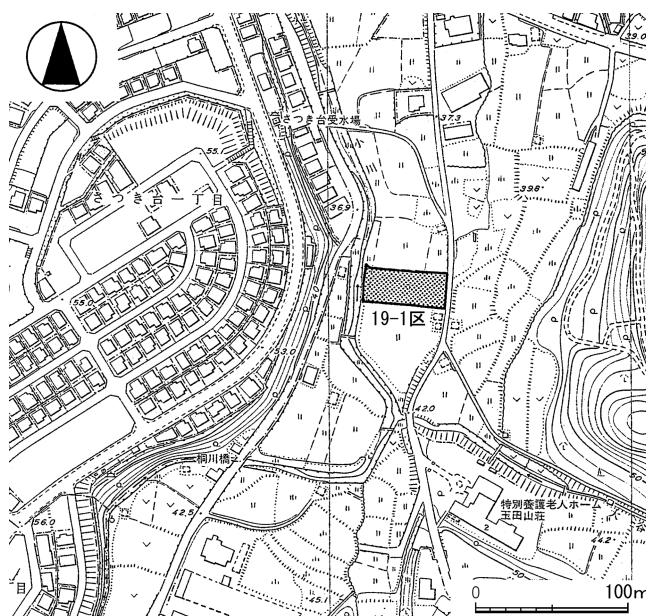
### (1) 19-1区(第24～26図)

調査区は寺田山遺跡の南西部に位置する。調査区内の北西部に3.8m×2.9mのトレンチを設定し、調査を行った。

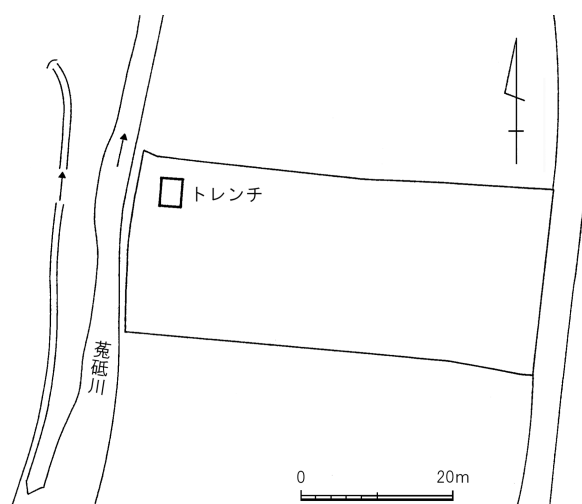
基本層序は第1層耕作土、第2層床土、第3層2.5Y7/3浅黄色粘質土(マンガン混)、第4層10YR6/6明黄褐色粘質土(マンガン混)、第5層10Y5/3にぶい黄褐色砂礫混粘質土、第6層は2.5Y5/3黄褐色礫混粘土の地山である。地山は地表面から約-0.75m～1.00mで検出した。

遺物は第4層から銅製の蝶番、第5層から磁器、鉄釘、炭化物が出土した。第3・4層は時代を特定できず、第5層は近世期の層と思われる。

遺構は第5層上面で土坑を1基検出した。東西1.92m以上、南北1.27m以上、深さ0.10mで、トレンチ外へ広がる。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色粘質土で炭化物が混じっていた。遺物は出土しなかった。

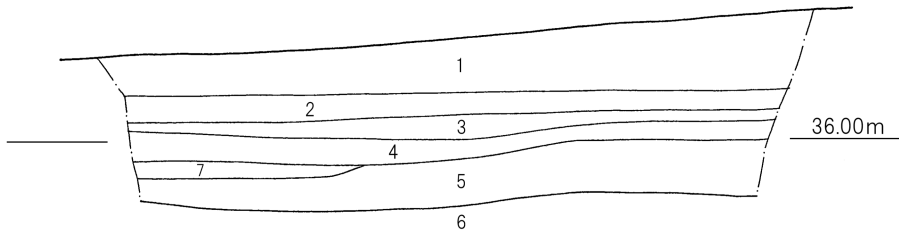


第24図 寺田山遺跡 調査区位置図

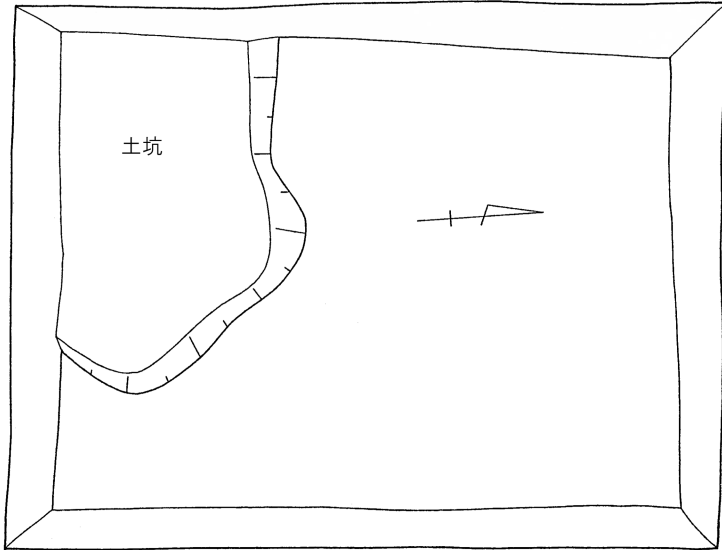


第25図 寺田山遺跡19-1区 トレンチ位置図





第5層上面



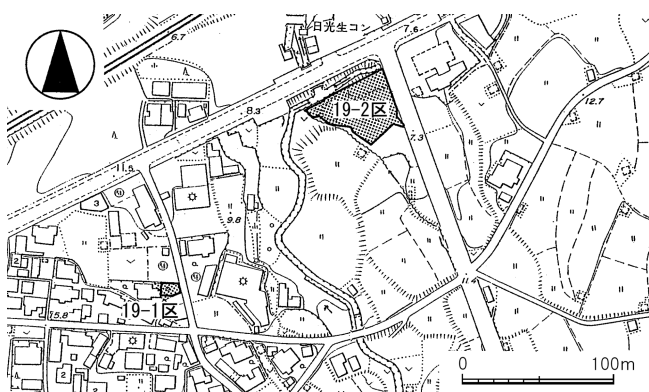
- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 2.5Y7/3 浅黄色粘質土(マンガン混)
- 4 10YR6/6 明黄褐色粘質土(マンガン混)
- 5 10Y5/3 にぶい黄褐色砂礫混粘質土
- 6 地山：2.5Y5/3 黄褐色礫混粘土
- 7 土坑：2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土(炭化物混)



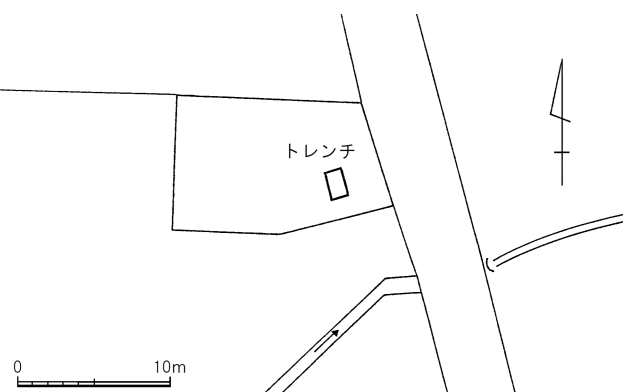
第26図 寺田山遺跡19-1区 トレンチ平面・断面図

## 第7節 貝掛遺跡

貝掛遺跡は、当市の中央部を流れる釈迦坊川と花折川に挟まれた南北に長い谷に位置する。昭和61(1986)年度に阪南町教育委員会(当時)が行った調査では中世期の溝が数条検出されたほか、縄文時代のサヌカイト製石槍や石鏃、土師器、須恵器、瓦器、近世陶磁器等、様々な時代の遺物が確認された。また、同年に財団法人大阪府埋蔵文化財協会(当時)が実施した調査では、近世期の建物跡が確認され、文献や絵図等に記載されている同時代の集落「舞村」の存在が裏付けられた。その後、平成元(1989)年度に阪南町教育委員会(当時)が行った調査により、7世紀前半の建物跡を検出したほか、土坑から金銅製耳環や奈良三彩の八曲長杯等、特異な遺物が出土している。



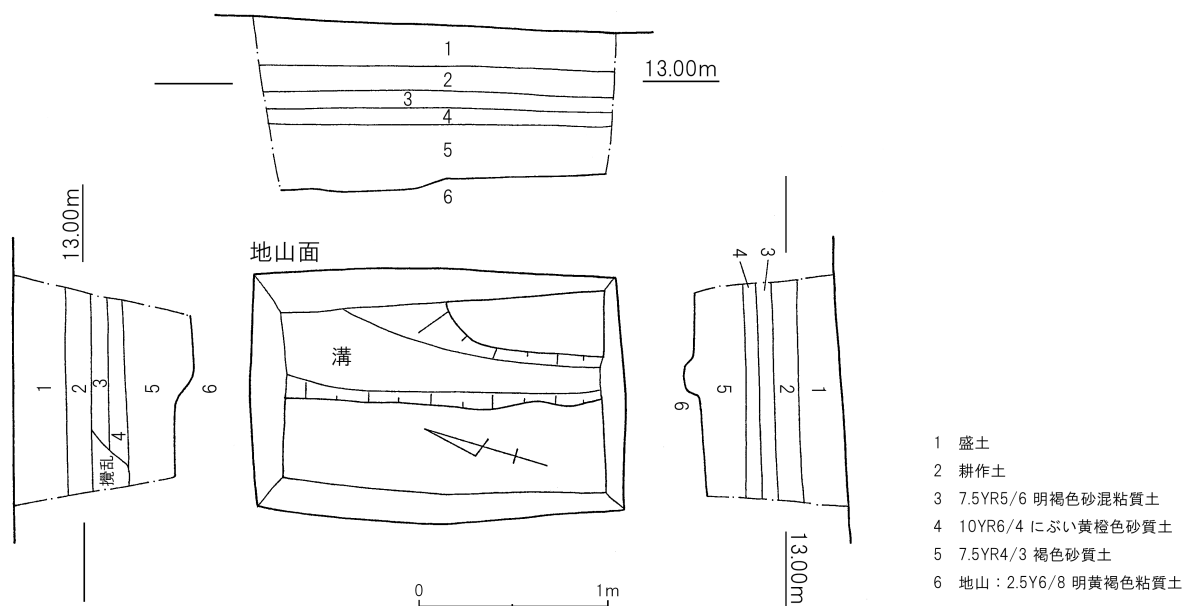
第27図 貝掛遺跡 調査区位置図



第28図 貝掛遺跡19-1区 トレンチ位置図

### (1) 19-1区(第27~29図)

調査区は貝掛遺跡の北西部に位置する。調査区内の東部に1.9m×1.2mのトレンチを設定し、調査を行った。



第29図 貝掛遺跡19-1区 トレンチ平面・断面図

基本層序は第1層盛土、第2層耕作土、第3層7.5YR5/6明褐色砂混粘質土、第4層10YR6/4にぶい黄橙色砂質土、第5層7.5YR4/3褐色砂質土、第6層は2.5Y6/8明黄褐色粘質土の地山である。地山は地表面から約-0.75mで検出した。

遺構は地山面で南北方向の溝を1条検出した。長さ1.70m以上、幅は南部では0.22m、北部では0.70m以上、深さ0.07m~0.10mで、トレンチ外へ広がる。

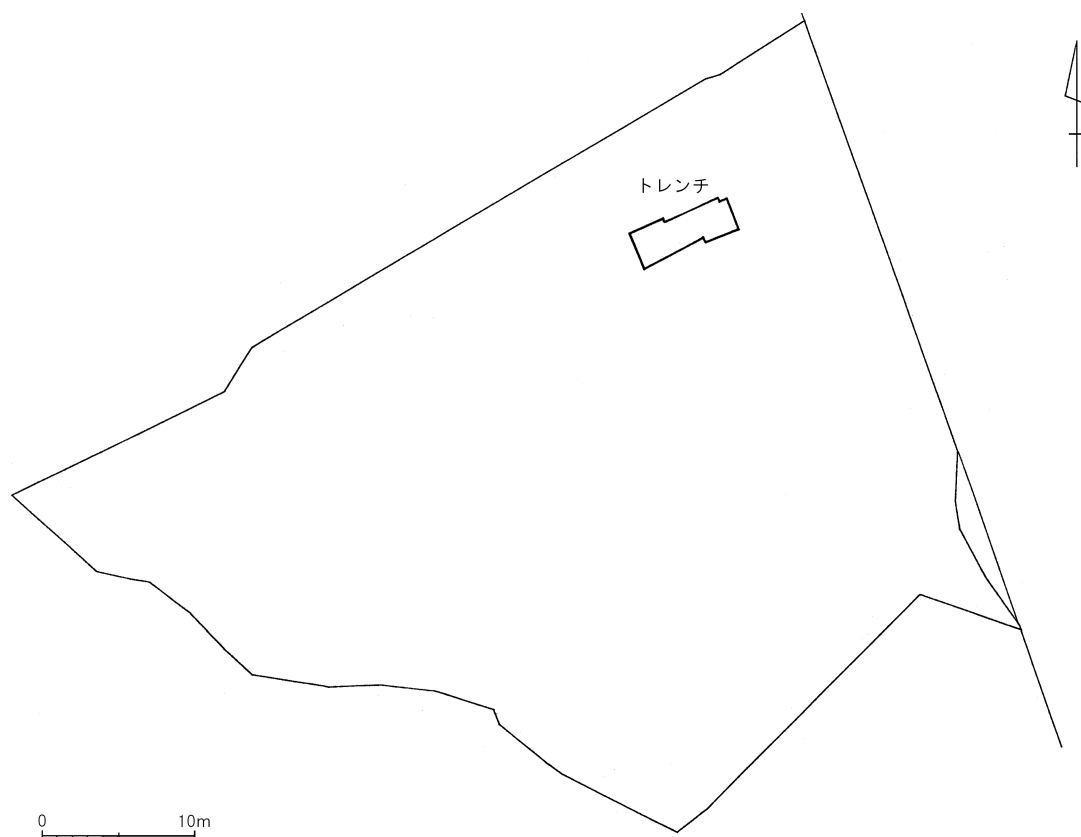
埋土は第5層と同じで、遺物は青磁が出土した。中世期の遺構である。

## (2)19-2区(第27・30~32区)

調査区は貝掛遺跡の北部に位置する。調査区内の北東部にトレンチを設定し、16.87㎡の調査を行った。

基本層序は第1層盛土、第2層耕作土、第3層5Y5/3灰オリーブ色砂混粘質土、第4層10YR6/8明黄褐色砂混粘質土、第5層2.5Y6/3にぶい黄色砂混粘質土、第6層10YR5/6黄褐色砂質土(マンガン混)、第7層10YR6/6明黄褐色砂混粘質土、第8層2.5Y6/1黄灰色砂混粘質土、第9層7.5YR6/6橙色砂混粘質土で、第8層以下は地山である。地山は地表面から約-2.80mで検出した。

遺物は第3層から土師器、須恵器、土師質土器、第4層から須恵器、土師質土器、須恵質土器、瓦器、第5層から須恵器、土師質土器、第6層からサヌカイト製石器、土師器、須恵器、製塩土器(奈良)、第7層から土師器が出土した。第3~5層は中世期、第6層は奈良時代、第7層は奈良時代以前の層と思われる。1は



第30図 貝掛遺跡19-2区 トレンチ位置図